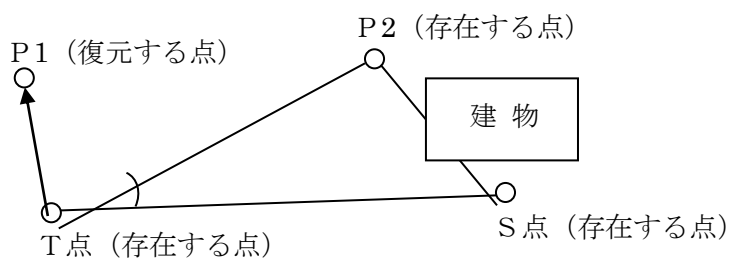


◆境界復元測量図、道路区域復元測量図

標識を再埋設しようとする場合は、座標が記載された土地境界図等に基づき、現地調査・測量をし、P点、T点、S点の種類にかかわらず3点以上の点が土地境界図における座標的位置関係と同様であることを確認して、はじめて承認願を提出することができるものとする。

この現地測量結果を表した図面を境界復元測量図、道路区域復元測量図という。

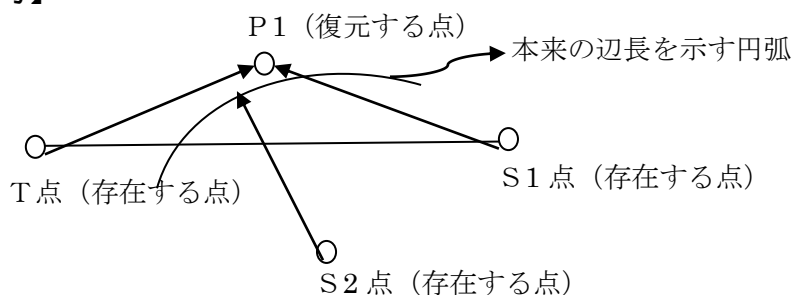
模式的には次のような場合に境界復元測量図、道路区域復元測量図として受領できるものとする。



【解説】

- 1 紛失した点P1を復元するため、現在も存在している3箇所の点の関係（三角形の三辺延長、または建物が存在するような場合は、二辺の延長と二辺に挟まれた角度）が土地境界図と同様な結果となる3点を現地調査・測量により捜しだす。
- 2 上記3点のうちの1点を直接器械設置点としてもよいし、3点とは異なる点を器械設置点としてもよい。どちらにしても、器械設置点から3点とP1との関係から計算したP1の座標値について逆打する。

【参考】



2点（T点、S1点）のみからP1を復元した場合、他の1点（S2点）からの辺長が一致するとは限らないため、2点間の関係が満足していても、この2点からのP1復元は信頼性がない。

土地境界復元測量図
(既設点に器械を設置する場合)

作成例
土地境界図を利用

復元測量図作成方法

S=1:250

渋谷区〇〇町〇〇番〇〇ほか

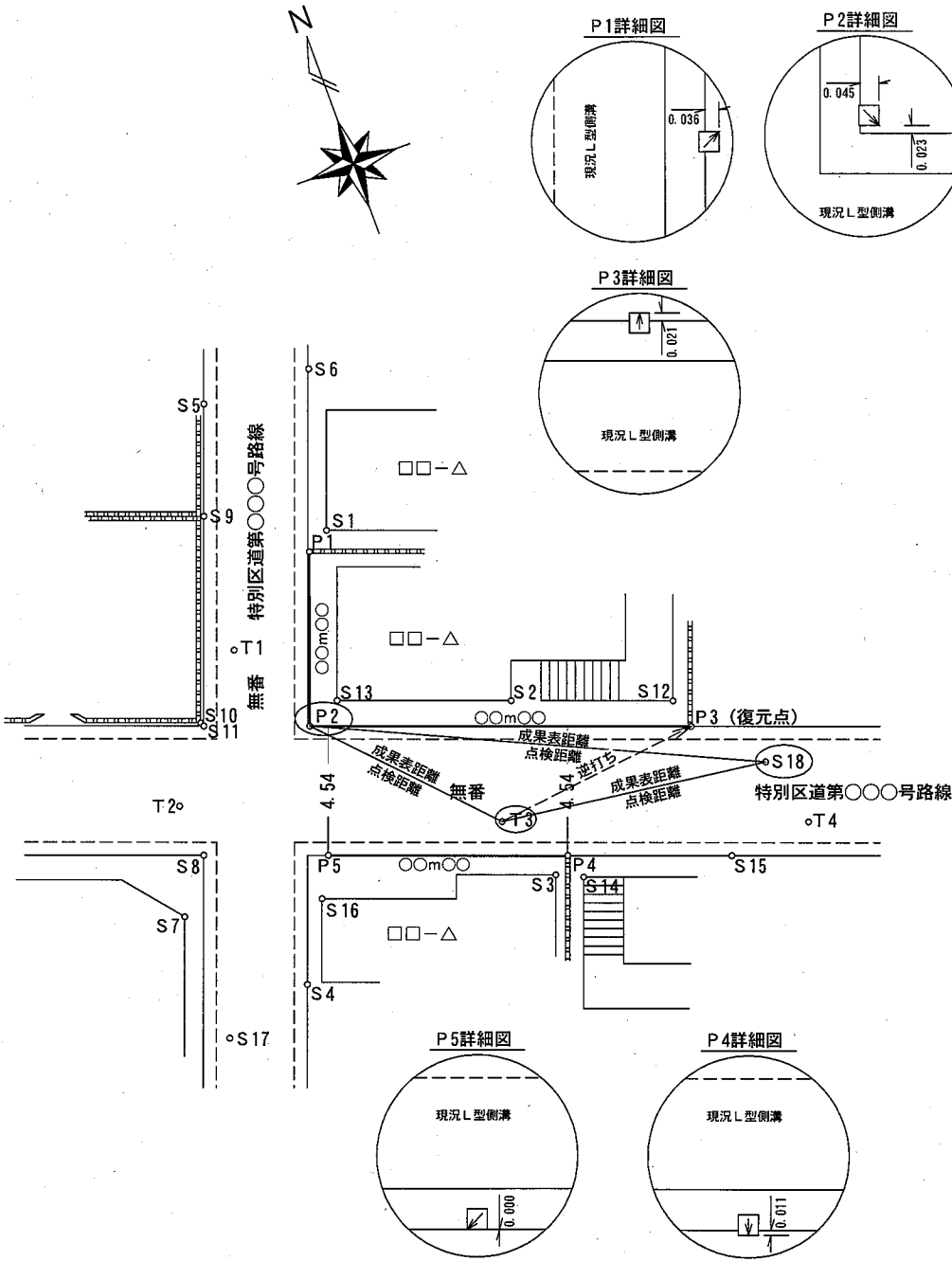
- ①現地に残る地物のうち、確実に当初のもので、埋設誤差や測量誤差が微小な3点を確認する（3点はあまり近接していない方がよい）。図面内にこの3点の点間距離である当初座標一覧表から計算した成果表距離及び観測（点検測量）の結果である点検距離を記載する。3点のうち1点に器械（トータルステーション等）を据え、他の2点を観測し、復元点を逆打ちする。なお、器械を据える点は、T点、P点、S点の種類は問わない。
- ②3点の關係に問題がないことを観測により確認後、当初座標系により計算した復元点を逆打ち（方向角と距離による再標示）する。
- ③道路区域復元測量図についても、土地境界復元測量図と同様の作成方法とする。

座標一覧表（当初座標系）

N0	X	Y	備考
T3	000.000	000.000	採用（器械設置）
P2	観測値	観測値	採用
S18	観測値	観測値	採用
S12	観測値	観測値	変更あり⇒不採用
S15	—	—	紛失⇒不採用
P3	計算値	計算値	復元点

※右図は、新たなトラバー点を設置せず、T3を器械設置点とした例。成果表距離と点検距離との誤差は、成果表距離の1/2000以内とする。なお、採用したT3、P2、S18の写真を承認願に添付すること。

凡例	○ P n	境界点
	○ S n	引照点
	○ T n	器械点
	〇〇m〇〇 ○ — ○	境界辺長



座標一覧表

N0	X	Y	備考
P1	000.000	000.000	区金属標
P2	000.000	000.000	区金属標
P3	000.000	000.000	区金属標（既設）
P4	000.000	000.000	区金属標（既設）
P5	000.000	000.000	区金属標
S1	000.000	000.000	建物角
S2	000.000	000.000	建物角
S3	000.000	000.000	建物角
S4	000.000	000.000	民石標
S5	000.000	000.000	民金属標
S6	000.000	000.000	計算点
S7	000.000	000.000	建物角
S8	000.000	000.000	区石標
S9	000.000	000.000	区金属標
S10	000.000	000.000	ブロック塀角
S11	000.000	000.000	区石標
S12	000.000	000.000	建物角
S13	000.000	000.000	建物角
S14	000.000	000.000	階段角
S15	000.000	000.000	民金属標
S16	000.000	000.000	建物角
S17	000.000	000.000	街区基準点 3A-〇〇〇
S18	000.000	000.000	渋谷区3級基準点 3-〇〇〇
T1	000.000	000.000	鉋
T2	000.000	000.000	鉋
T3	000.000	000.000	鉋
T4	000.000	000.000	鉋

作成者	
立会年月日	平成〇〇年〇〇月〇〇日
測量年月日	平成〇〇年〇〇月〇〇日

土地境界復元測量図

(既設点に器械を設置しない場合)

作成例
土地境界図を利用

復元測量図作成方法

- ①現地に残る地物のうち、確実に当初のもので、埋設誤差や測量誤差が微小な3点を確認する（3点はあまり近接していない方がよい）。図面内にこの3点の点間距離である当初座標一覧表から計算した成果表距離及び観測（点検測量）の結果である点検距離を記載する。3点のいずれも器械の設置が難しい場合は、3点と復元点が観測できる位置に新たなトラバー点を設置する。新たなトラバー点からの観測は、任意座標系となる。
- ②3点の關係に問題がないことを観測により確認後、新たなトラバー点から計算した復元点を逆打ち（方向角と距離による再標示）する。なお、座標系は、任意座標系のままでも、当初座標系への変換でもよい。
- ③道路区域復元測量図についても、土地境界復元測量図と同様の作成方法とする。

座標一覧表（任意座標系又は当初座標系）

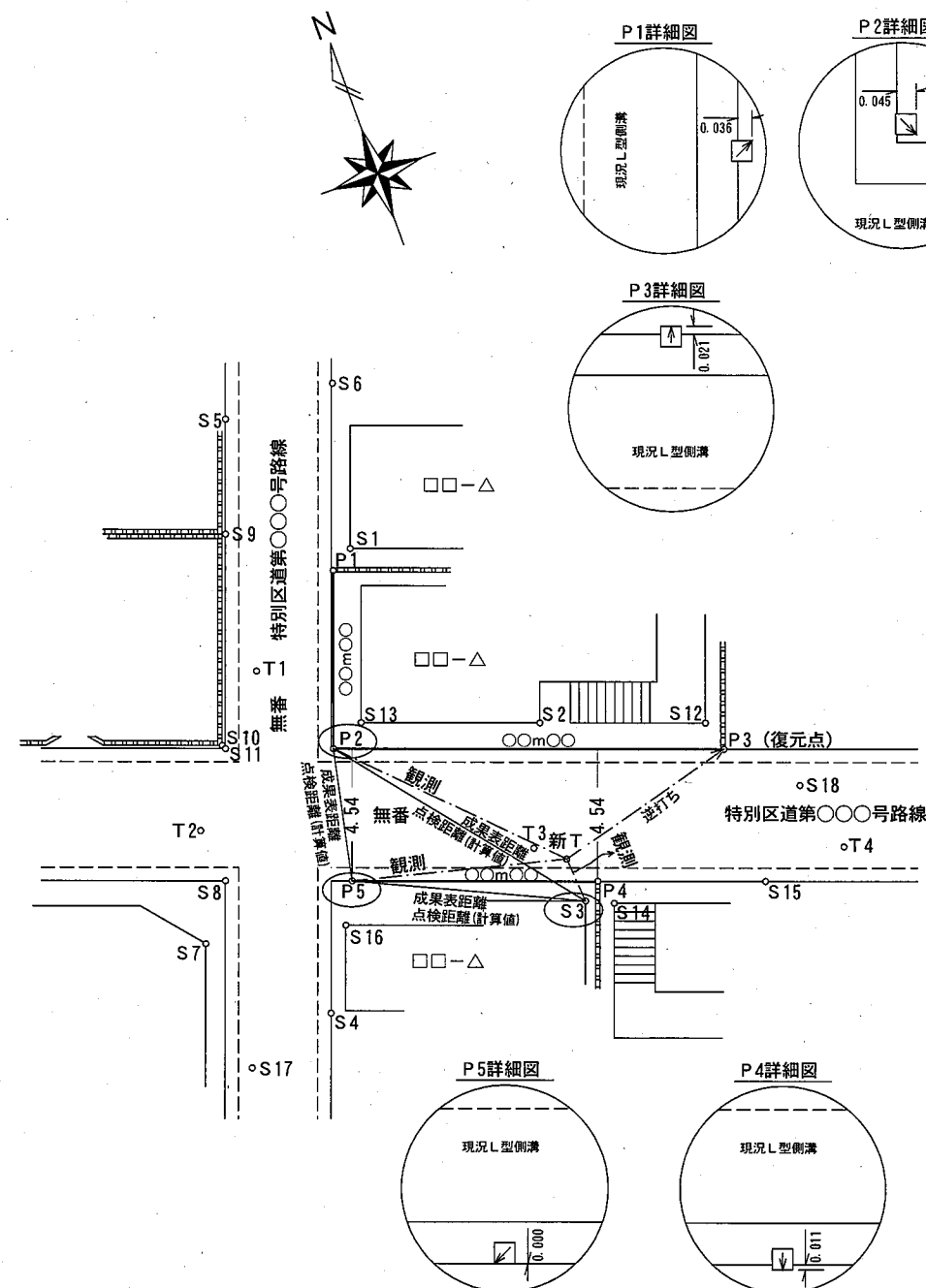
N0	X	Y	備考
新T	例100.000	例100.000	新たなトラバー点
T3	——	——	紛失⇒不採用
T4	——	——	紛失⇒不採用
P2	観測値	観測値	採用
P5	観測値	観測値	採用
S12	観測値	観測値	変更あり⇒不採用
S3	観測値	観測値	採用
P3	計算値	計算値	復元点

※右図は、新たなトラバー点からP3を復元する例。
点検距離は、観測結果から計算で求めた値である。
成果表距離と点検距離との誤差は、成果表距離の1/2000以内とする。
なお、採用したP2、S15、S18の写真を承認願に添付すること。

凡例	○ P n	境界点
	○ S n	引照点
	○ T n	器械点
	○○m○○ ○ ——— ○	境界辺長

S=1:250

渋谷区○○町○○番○○ほか



座 標 一 覧 表

N0	X	Y	備考
P1	○○.○○	○○.○○	区金属標
P2	○○.○○	○○.○○	区金属標
P3	○○.○○	○○.○○	区金属標（既設）
P4	○○.○○	○○.○○	区金属標（既設）
P5	○○.○○	○○.○○	区金属標
S1	○○.○○	○○.○○	建物角
S2	○○.○○	○○.○○	建物角
S3	○○.○○	○○.○○	建物角
S4	○○.○○	○○.○○	民石標
S5	○○.○○	○○.○○	民金属標
S6	○○.○○	○○.○○	計算点
S7	○○.○○	○○.○○	建物角
S8	○○.○○	○○.○○	区石標
S9	○○.○○	○○.○○	区金属標
S10	○○.○○	○○.○○	ブロック塀角
S11	○○.○○	○○.○○	区石標
S12	○○.○○	○○.○○	建物角
S13	○○.○○	○○.○○	建物角
S14	○○.○○	○○.○○	階段角
S15	○○.○○	○○.○○	民金属標
S16	○○.○○	○○.○○	建物角
S17	○○.○○	○○.○○	街区基準点 3A-○○○
S18	○○.○○	○○.○○	渋谷区3級基準点 3-○○○
T1	○○.○○	○○.○○	鉋
T2	○○.○○	○○.○○	鉋
T3	○○.○○	○○.○○	鉋
T4	○○.○○	○○.○○	鉋

作成者	
立会年月日	平成○○年○○月○○日
測量年月日	平成○○年○○月○○日